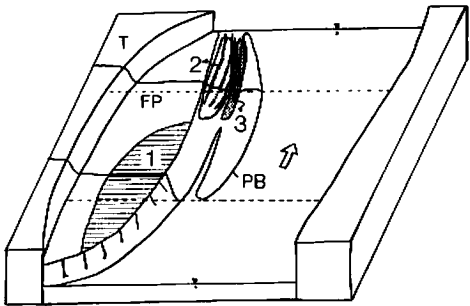


天塩川下流部における蛇行河川の氾濫原形成過程について

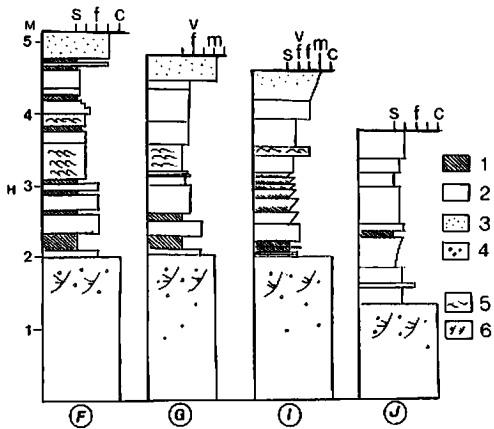
手塚清子(自然科学類)
池田宏(地球科学系)

天塩川は1981年8月6日に既往最大の洪水にみまわれた。その洪水によって生じた堆積物の分布を調べ、蛇行河川の氾濫原形成過程を考察した。
調査区間(河口から25~30 km)の氾濫原は、高位面と約3 mの比高差をもって狭く分布している。攻撃斜面が垂直な崖であるのに対し、滑走斜

面は階段状を呈している(第1図)。この氾濫原上に生じた洪水堆積物を3種類に分類した(第1図、第1表)。第2図に示すように、氾濫原の構成物はその粒度・堆積構造・分布高度から、3種類の洪水堆積物が垂直的に重なり合ったものであることが判明した。



第1図 洪水堆積物の分布
1: 河畔堆積砂, 2: bench sand, 3: シルト
T: 沖積(高位)面, FP: 氾濫原, PB: 寄州



第2図 氾濫原構成物と洪水堆積物の対応
1: シルト(s), 2: 極細砂(vf)~細砂(f),
3: 中砂(m), 4: 粗砂(c), 5: 砂れん葉理,
6: 斜交層理

第1表 洪水堆積物の分類

洪水堆積物	分 布	層 厚(cm)	粒 度	堆 積 構 造	分布高度(m)
河畔堆積砂	攻撃斜面側の河畔 ~氾濫原	10~30	細砂~中砂	逆グレーディング	4.5~5
bench sand	滑走斜面上	10~50	極細砂~細砂	逆グレーディング 砂れん葉理	1.5~5
シルト	滑走斜面と 寄州の間	5~10	シルト	無 層 理	0.3~0.5